

みんながっていい

1. 夢のみずうみ村

1903年から1030年に生きた金子みすずの詩の一節です。

また、リハビリが必要な人のためのデイ・サービス・センター「夢のみずうみむら」(山口県)のコンセプトでもあります。「みんながっていい」は、マイクロ・バスにも描かれています。僕は2度ほどこの施設を訪問しました。

徹底して「バリア・フリー」のデイ・サービス・センターです。コンセプトは、4つあります。そのうちの2つは、「一日の過ごし方を、それぞれご自分で決めます。(自己選択・自己決定)」と「生活を楽しむためのリハビリを実践します。」とあります。昼寝あり、マージャンあり、片麻痺の方のための料理教室あり、さまざまなプログラムを自分で選択します。



プログラムはじぶんで決めます。

見学者は、片麻痺の方と一緒に昼食をとります。目の前の片麻痺の男性は、慣れない左手を使ってボロボロこぼしながら食事をしていました。そのとき、「あ、オレだったら恥ずかしくて人前じゃなかなか食べたりできないかもしれないな」というのが率直な感情でした。そして彼は僕よりも食欲がありました。それは「ただのオッサン」になっていない見学者(僕)を感じさせたヒトコマでもあります。



この「村」の憲章には、金子みすずのところが伝わってきます。

生きていることはすばらしい
一人一人みんながちがうからいい
人の心の温かさにつつまれる中でこそ、
人は真に生きることができる
違いを尊重し見守ってくれる、
そんな仲間がいることがすばらしい

みんながってみんないい

「ゆめ」はそこに生まれる
一つ一つの「ゆめ」を、
みんなで育て、わかちあおう

生きていることがすばらしい

ここから出発することになります。

2. CanとMustとWant

2008年と2009年の2年、健康生きがいつくりアドバイザー(以下AD)となられた方の43%が、50代から下の年代です。1946年以前に生まれた層、1947年以降のいわゆる団塊の世代、そしてすこし飛躍して1961年以降に生まれた層は、年金受給額と年金受給年齢に相違があります。あるいは属する組織は、ピラミッド型の単体からフラットな組織だったりアメーバ型の組織と多様になっています。あるいはまた年功序列から多様な賃金体系となったり、雇用形態も何種にもなっています。ある企業では、中途採用者を3年の期限つきで採用、企業人としてその期間内次にめざす職業のスキルを磨いてもらうといった形態もあります。

こうしたなか、今回のメールは、若い世代がADとなって活動するきっかけ、ミッションはなんだろうかと改めて問う機会となりました。

「共同社会」の活動で、「共有するミッション」を持つ方と活動することが、「有償」=「利益社会の活動」だと規定すると、コトはとても重く感じられていきます。

ミッションあり、活動は無償のボランティアとする、ある世代にとって、このテーマはMustの世界として映るかもしれません。

各地にマイクロ・バスが迎えに来て、レクリエーションをして楽しみ、ランチをとり、お風呂に入ったりして自宅に戻る。そんなみんなとおんなじことをやるのは勘弁だわ、だけど、毎日ひとり家にいるのも辛い。

そんな方を対象にしてコミュニティ・カフェは始まりました。

昔、お針子をしていたから繕いものだったらやるよ、それに大きな声出してみんなとなんかしないでいいなら、そこに行こうと思う。

1日、本を読んだり、昼寝したり、そして誰かがいる、そんな1日が欲しい。

近所のギャルママが、下の子が風邪を引いたので、「おばあちゃん、上の子見ていてくれない」人が近くにいる。だったら空き家を借りてそうした人が集う場にしよう。

コミュニティ・カフェは静かに広がっています。

これって、Canの世界だと思うのです。

こうしたことがいつか次の世代が担い、Wantの世界に向かっていくのではないのでしょうか。

そして、ここで若いADや、64歳になったとき夫婦で年280万の年金受給者(団塊世代)や、国民年金で生活するひとが、「ミッションを共有する人々」たりうるかと思い巡らしてみます。

たぶん不可能でしょう。

では、ADやミッションをもって活動する人は、一種選ばれたひと(選民)に限定せよということになるのでしょいか。

いつかは協議会やその代表は、次の世代にバトンタッチします。

代表の期限を設定している健生もあります。活動の中心となって実績を積まれた方が代表でいらっしゃる健生があります。名誉会長や名誉顧問になって「私を活用(利用)していいよ」という健生もあります。

さまざまな世代の相違から本論に入りたいと思います。

3. 時代

1945~60's

小学生だったころ、下校時に「この小高いところに劉邦が作戦を練っていた」、曹操であるボクは大軍を率いて、明日の一戦に備えている。私は、乃木 希典だったかもしれません。女性は?すみません、思いつかないことをお許しください。

1945年から



左から、ゴミ捨て場のバー、帰還兵、靴磨きの少年、神田駅高架下のくず鉄屋さん

1960年前後



左から「おとなの漫画」(ハナ肇とクレージー・キャッツ)、60年安保、60年代イギリスファッション誌

1945年、日本は戦争に負けました。

1947年、児童福祉法が、1948年、障害者福祉法が成立します。

ちなみに、母子及び寡婦福祉法が成立するのは1964年(昭和39年)です。

一転して、テレビはまだ生放送が主流だった頃、1959年3月2日、青島幸男の構成でハナ肇とクレージーキャッツの「おとなの漫画」が始まります。

毎日12時50分から10分間の生番組でした。

土曜、一人の中学生は、放課後の掃除をサボり、「ごめん、帰る」と駆け足で帰宅して、わくわくしながらテレビに釘付けになっていました。

安保闘争。

この上下(1945年と1960年前後)の写真には大きな落差があります。

この国が豊かになっていく=じぶん(達)の生活が豊かになっていくから、

じぶん(達)の生活が豊かになっていく

という変化があります。

「おとなの漫画」には右肩上がり(健康というのでしょうか)の快樂を感じてしまいます。

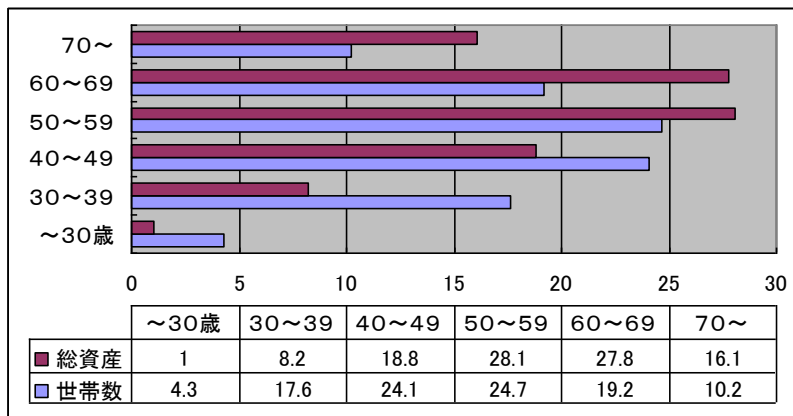
3. 世界で富を享受する層は、人口の15%

この2つの時代の違いは、実はとても大きく、かつ、1960年以降に生まれた世代を含めるとさらに3層の世代の違いとなって現れます。

2つの資料をご覧ください。少し乱暴な比較になりますが、「ボランティアは無償でなければいけない」という主張は、多様な世代に共通するものではないことがご理解いただけるのではないかと思います。

まず、アナリストとして著名な水野和夫氏の共著「超マクロ展望」(筑摩書店) 105ページから「高所得国の人口シェアを示したものです。ヨーロッパのためのグローバル化は一六世紀にはじまりましたが、それが進展した一八七〇年から二〇〇一年までに着目してみると地球の全人口のうちの約一五%だけが豊かな生活を営むことができたのがわかります。ヨーロッパの価値観を受け入れた国ということで、このなかにはアメリカや日本も入っています。」

次に2005年の「国民生活白書」の108ページにあるデータです。



今年は2011年ですから単純にスライドすると、66歳以上の層が国民総資産の43.9%を占有していることになります。

先の世界の富の占有率15%と比べるととてつもない数値です。

更に年金受給額を加えたとき、まだ逃げ切れるといわれる団塊世代、それより若い世代に「ボランティアは無償だ」と云い続けるのはmustの世界を強いることにならないでしょうか。

地域の課題をビジネスの手法を使って、その課題を解決する。

その成功事例はまだ多くありません。だからこそ、次の世代の活動につながる、次の世代に遺せる活動を押し進めることも大切だと思うのです。

水野氏は「低成長を前提とした脱近代的な社会システム」の必要性も述べています。具体的な成果を上げつつある活動を、水平展開する、そうした取り組みのご支援をぜひともおねがいいたします。

最後に、「2030年超高齢未来」(東京大学高齢社会総合研究機構)の一部を引用します。

理事長も「『Aging in Placeをかなえる在宅医療』」を著しています。

団地の空間には基本的に、「公」的な空間と「共」的な空間、そして「私」的な空間があります。

これらの空間のメンテナンスのされ方を調べてみると、必ずしも公空間だから公共がメンテナンスをしている、共空間だから町会などの共同体がメンテナンスをしている、私空間だから、個人がメンテナンスをしているという構図にはなっていないケースが多いことがわかります。たしかに、街をつくる段階では、公共私空間をそれぞれの主体が管理することが予定されていたのですが、実態としては、公・共・私の垣根を越えて、街が運営されているのです。

公の主体である行政にお金がなくなると、公園里親制度などが出てきます。これを共同体や個人が引き受けているわけです。 制度化されていなくても、自発的に公園や街路樹の手入れをしている個人や団体はたくさんあります。しかも、それが生きがいや商売に直結することもしばしばです。

一方で、「私」の空間はこれまで、 荒地になろうがボロ屋になろうが、放火の危険性があっても、ごみ捨ての危険性があったとしても、誰も手をつけられませんでした。日本においては「私有」は絶対不可侵という風に観念されているからです。しかし、最近では、空き地・空き家の増加に伴って、私空間の管理が地域の共通の課題になってきています。

こうしたことに対して、現実ではすでに、たとえば町内会レベルで空き家の地主と交渉し、場合によっては共同体で個人の空間の手入れ(草刈や最低限の庭木の剪定)をする、といったことが行われているところもあります。個人の財産であっても積極的に共同体や他の個人が関与して、地域の公共のために個人の財産を「耕して」いる。そういうことが始まっているのです。

公・共・私の管理区分の壁をどう乗り越えるか、それがわたしたちの課題です。

これからは街を新たにつくる仕事は減り、街をつくり直す仕事が、小さいレベルでどんどん増えていくでしょう。そのノウハウを蓄える必要があります。それが、今後のビジネスチャンスにもなりえるでしょう。

☆

高齢者が就労することで社会に貢献し、生きがいを見出せるようにする。そんな「生きがい就労」のモデルを、さまざまな形で試していくことが求められます。

(太明朝は大谷)

「ボランティアは無償である」という立場からは、これは罪でしょうか。